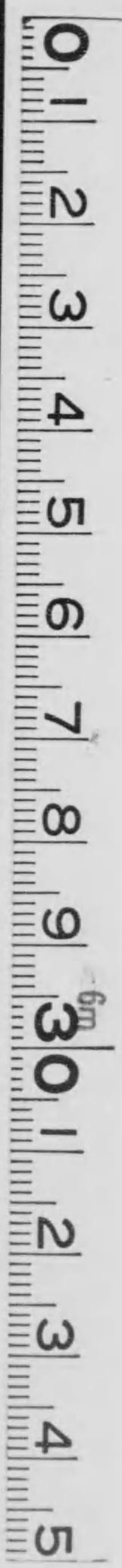


始



91
798





94
598

修養語

94-798

京都

護法館發兌

修養詩話全

文學博士 南條文雄先生序
蘇州 安藤州一先生著

大正

2. 7. 22

丙午

序

京都東六條護法館主人より、安藤荻洲君の「修養詩話」の前半を郵寄し、近々全部刷了の運びなるを以て、題字又は序文を書せよとの郵書來れり。余曾て其一斑を「精神界」雜誌に於て一讀し、頗る君の著眼の奇抜にして説明の親切なるに感ぜしことあり。其後は「精神界」を見

ざりしこと已に年餘なるに、今之を別冊とし
て携帯に便にすこと云ふ、余等の喜び知るべき
なり。抑古來和漢の諸家に詩話の著ある者尠
しとせず、而して今此書は詩を以て修養談話
を作せる者、既に已に古人と其撰を異にする
所ありと謂ふべし。故に讀者反覆玩味すれば
其心中自然に安立の域にも達し得べしと信

ず是れ實に此書の特色也。然らば則ち此書も亦白香山の謂はゆる、讚佛乗の因、轉法輪の縁ともなることなるべしと、隨喜の餘、此燕語を書して以て來意に答ふ。佛頭糞を加ふの諷は敢て辭せざる所なり。

大正二年六月二十六日

碩果生 南條文雄識す

附記

本書「四九、雲華上人の詩」の項下、一八〇頁に、燈寮司とは何人の事なるや、余いまだ之を知るに及ばず。碩果上人に質さば一朝にして明かなるべしとあり。然れども余の寡聞なる未だ雲華老師に隨行せし寮司にして、其名に燈の字ありし人を知らず、又講者略傳にも老師以後に講者となりし人の名に燈の字ある

を見ず、故に疑を闕くこととす。

因みに余の號の碩果の二字は周易の剝の上九に、碩果不食とある所より取り來りしこと雖も、固より不食の二字を始めこして、君子得輿、小人剝、盧なご、云ふ意義までを取りしに非ざるなり。日本外史に據るに、慶長五年九月十三日、徳川家康の軍岐阜に至る、或人（即ち

立政寺の和尚巨柿の實を獻ず、家康戯れて曰く、大垣我が手に落つこ、之を地に擲ちて、近臣をして之を取らしむ、蓋し垣と柿と國音相通ずるを以てなりとあり。余は大垣に生れ、而して日本外史は幼時愛讀の書なりしを以て、單に大垣生れと云ふことを示さん爲めに、碩果生、又は碩果を以て號とすることなり。易を研

究して、余の號は頗る自負心を發露すこ云ふ
者あらば、然らず、是れ此辨ある所以なり。

碩果生

龜崎晚眺

蓼花紅老荻花稀。

波間鷗影帶魚飛。

隔海家山歸計違。

芳野金陵

漁笛一聲斜照澗。

野島崎所見

風濤恰若競雌雄。

寸帆影落墨雲中。

決皆東雨眼力窮。

知是無人島邊雨。

序

夫れ詩は、性情に出で、また性情に入る者なり。性情に出づるが故に、理論を超絶し、直ちに其眞情を吐露す。讀む者亦性情を以て之を邀ふ。故に推理思索の煩を離れ、直ちに詩境と冥合せんこそす。風詠吟誦の中、自から道に進むを

知らず、而して道常に其人を離れず。故に古へ
兒童を教ふるに、必らず先づ詩を以てす。勞少
くして益多きを以てなり。

抑も修養は難事なり、信仰も亦人生の一大
事件なり。理論を以て之を問へば、理論に落ち
て眞境に達せず。推理を以て之を教ふれば、推

理に偏して大道に至らず。嗚呼亦難しと謂つ
可し。余嘗て謂ふ、宗教と文學と相一致するを
得ば、この難關を脱するに庶幾からん乎。何を
以て之を言ふ。曰く我が國古へより、西國の觀
音に就て、三十三の詠歌を存す。番々の風詠、大
悲の深きを湛ぬ、慈恩の高きを述ぶ。これを吟

四
詠する者、忽然として推理の地を離れ、直ちに
佛心と冥合せんことす。此時また何等の遲疑な
く、また何等の論證を要せむや。抑も文學の旨
趣一ならずと雖も、宗教と一致するに至て、能
事畢れりと云ふ可し。

予此論を持する久し、而して未だ其是非を

五
以て、江湖の識者に質すに違あらず、竊かに以
て遺憾となす。往者、「精神界」誌上に於て、「山
茶花樓詩話」と題し、古人の詩句の、胸臆に存
する者に就て、聊か修養の意を寄せ、且つ信仰
の旨を述べ、いまだ文學宗教の一致に至らず
と雖も、亦其一端を示す所以なり。唯其れ讀者

と共に、悠々涵泳の間、絶對無限の機微に觸れんと欲するのみ、豈に他あらんや。因て「修養詩話」と名け、之を冊子と作し、併せて余の宿論を擧げ、江湖の識者に問ふこと爾り。

大正二年癸丑六月二十二日朝

安藤州一識

修養詩話目次

一	詩中の風光……………	一
二	五岳上人の奇才……………	三
三	凌霄花の詩……………	六
四	春寒の佳句……………	九
五	李白に倍せる詩……………	二二
六	子玉の秀才……………	二四
七	佳句の暗合……………	二七
八	竹田の蘊蓄……………	二九

九	青色を帯びたる詩	三
一〇	仁齋と徂徠	三
一一	豪氣と溫和の二面	七
一二	平野國臣の國風	三
一三	桀狗堯を吠ゆる	三
一四	淡窓先生の愛詩	七
一五	高青邱の禍源	九
一六	詩の讀方	三
一七	詩と俳句	七
一八	三典の歌	六

一九	詩は氣節を尊ぶ	六
二〇	美人と落花	七
二一	橋門先生の苦學	九
二二	翫案の妙句	七
二三	星巖の芳山詩	九
二四	萬里と竹田	八
二五	兩雄の苦心	七
二六	亦復一樂	九
二七	奇詩と善詩	九
二八	詩は氣韻を尊ぶ	六

四

二九	慷慨と風流は其人の天性……………	七
三〇	實景の詩歌……………	一〇一
三一	至誠天に徹す……………	一〇三
三二	絶海の詩……………	一〇
三三	楊貴妃櫻の歌……………	一〇
三四	杜子美と海棠花……………	一〇
三五	海棠花の詩……………	一〇
三六	詩中の青色……………	一三
三七	杏坪の佳作……………	一五
三八	他力の中に疑雲なし……………	一六

五

三九	文字已外の詩……………	一六
四〇	變化測る可らず……………	一三
四一	黄河の水天上より來る……………	一七
四二	食らざるを寶となす……………	一四
四三	師弟相肖る……………	一八
四四	物小にして識も亦微なり……………	六一
四五	模糊の二字……………	六四
四六	是れ尋常の詩人に非ず……………	一六
四七	俞曲園の詩眼……………	一八
四八	東涯先生の詩……………	一七

四九	雲華上人の詩	二六八
五〇	閑忙の際唯一髮	二八一
五一	岳上人の自得	二八七
五二	觀る者凡て恩寵	二九三
五三	乃木將軍の殉死	二九八
五四	信仰は自己を視る	三〇五
五五	詩に煙霞を帶ぶ	三二三
五六	花倒さまに生ず	三二七
五七	詩仙堂を訪ふ	三三〇
五八	叡麓の洞窟	三三二

五九	醒めたる人	三四二
六〇	良工苦心の跡	三四四
六一	詩人忠孝の意	三六九
六二	詩に由て文法を知る	三七九
六三	鶴に託して自から辯す	三八六
六四	遠帆樓の佳句	三九三
六五	病中の吟	三九五
六六	文字媒を爲す	三九六
六七	行に臨んで詩を賦す	三九八
六八	克堂陣中の詩	四〇二

六九 乃木將軍の清廉……………三〇四

七〇 梨花の佳句……………三〇六

七一 知己遇ひ羅し……………三一一

七二 世事常に相反す……………三二三

山茶花樓の懷舊

修養詩話目次終

修養詩話附録

山茶花樓の懷舊

一 一心一佛……………一

二 彈丸は偽善を許容せず……………二

三 信仰に割引なし……………三

四 實驗の詩歌……………四

五 我の安きは如來の御手の強きがためたり……………五

六 溢柿……………六

七 如來の選擇……………六

八	内心の改革.....	七
九	過ちを觀て仁を知る.....	九
一〇	人生は寒地を行くが如し.....	二
一一	精神の榮養.....	二
一二	三好長慶の連歌.....	三
一三	算盤以上の利益.....	三
一四	意志の強弱.....	五
一五	至誠人を動かす.....	一七
一六	山に入て花を知る.....	一七
一七	死中の生.....	二〇

一八	子孫の衣食.....	三
一九	兒を知るは親に如かず.....	三
一〇	唯佛一道.....	三〇
二一	我心の變化.....	三
二二	佛は是れ醫王.....	三
二三	千里の平原.....	三
二四	謠の三病.....	三
二五	自名の投票.....	七
二六	戀愛の懺悔.....	元
二七	野狼、村犬と相語る.....	三

二八	爾の自由に任せよ.....	四六
二九	柳暗花明.....	四七
三〇	憂悶の原因.....	四八
三一	如來に灌るの勇氣.....	四九
三二	春盡.....	五〇
三三	人影花間路.....	五一
三四	回春の時.....	五二
三五	武藏野の月.....	五三
三六	送春又送君.....	五四
三七	慈悲の重圍.....	五五

三八	故山の夏月.....	七〇
三九	争論の道絶ゆ.....	七一
四〇	鶴城の古戦場.....	七二
四一	別離の訓誡.....	七三
四二	恃むべきを恃む.....	七四
四三	樂んで憂を忘る.....	七五
四四	竹田の蘊蓄.....	七六
四五	胡枝花を觀る.....	七七
四六	救ひの姿.....	七八
四七	唯だ絶對に歸れ.....	七九

四八 悪人救済の可能 九
 四九 泥水沐浴 九
 五〇 教育家宗教家の報酬 一〇一

修養詩話附録目次終

修養詩話

荻洲散人

一 詩中の風光

梅花と水仙とが、古瓶に活けられてある
 其傍には青燈が光りを放つて居る。其間
 に端坐して、古今の詩海に棹さすと、煙波杳
 渺の間に、花もあれば月もある。青山もあ

詩中の風光

れば遠帆もある。漁唱も聞ゆる孤雁も鳴く。實に不盡の趣味がある。茶にも酒にも相當の趣味はあるが、詩を好む人に取ては、詩ほど面白いものはない。古詩を微吟して居ると、いつの間にか詩中の人に成り了りて、憂も消ゆる貧も忘れる、老のまさに至らんとするを知らずと云ふ風情がある。單に詩としても頗る佳句が多いが、詩話に

註解

五岳上人は豊後日田の人、專念寺に住す。姓は平野、名は聞惠、五岳は其號なり。また古竹園主人と號す。故に其書畫の落款

至ては種々の奇談がある。湮滅を防ぐがために、其二三を話して見たい。

二 五岳上人の奇才

五岳上人は、我が國では名高い詩僧であるが、壯年の時から、既に群を抜いて居た。上人の附近に護願寺村といふ村落がある。しかし寺があるのではない、唯さう云ふ村の名前である。或時、宜園門下の詩人が集

(4)

には、多く古竹老
衲と題せり。眞宗
大谷派の人、幼に
して淡窓先生に學
ぶ。先生、上人を
目して詩に別才あ
りと稱す、明治二
十六年、八十餘歳
にして没す。

つて、この護願寺村の或家に詩會を開いた
すると誰れ云ふとなく、五岳は餘りに詩才
があつて、いつも最高點を占むるから、今日
こそは困らせてやらうではないかと、衆議
が一決した所から、今は冬枯れの花のない
時であるから、韻字を分ける時分に、五岳に
花といふ字を當てるがよい。いかに五岳
が秀才でもない花を詩に作ることは出來

(5)

讀方

村は寺の名を帯び
て寺あるに非ず。
韻は花の字に逢ふ
て花なきを奈せん

ぬ。花といふ字を、何と用ふるか、そこが見
物であるといふので、紙片に其れ／＼字を
書いて、衆人に分けてやる時に、五岳上人に
は、君には是れが當つたと云うて、花字の紙
片を投げ出した。其時作つた上人の七律
中の一聯に、村帶寺名非有寺韻逢花字奈無
花と讀みこんだので、並み居る連中舌を捲
き、此會が果てるまで、自分の詩を懷中に隠

五岳上人の奇才

して、上人の前に出さない者があつたと云ふ事である。

三 凌霄花の詩

【註解】淡窓先生、姓は廣瀬氏、豊後日田の人、塾を開いて生徒を教授す、宜園は其塾の名也。遠思樓詩鈔は、先生の

『遠思樓詩鈔』の中に、凌霄花の詩がある。凌霄花は、俗にのうせんかづらとか云ふさうである。今現に八十二歳の老人で、淡窓先生の門人が生きて居る。四五年前に、其老人を訪うた所が、折しも夏の頃で、庭上の

詩集にして、前後篇四册あり、詩を學ばんとする者は此篇を熟讀すべし

老松に、凌霄花がまきついて、今をさかりと赤黄色の花を開いて居る。其花を見ると共に、淡窓先生の凌霄花の詩の話が出た。老人が云ふには、あの詩には少し因縁がある。淡窓先生の弟に、久兵衛と云ふ男があつたが、頗る秀才な人で、今で云へば、伊藤博文公を小形にした様な人物で、甘く發展すると、餘程の人物に成りさうであつたが、惜

讀方

凌霄花善く媚ぶる物に遇ふて自から縋繆。長松曾て策

しいことには、其近邊の旗亭の婦人のために身を誤つて、引くに引かれぬ、切るに切られぬ様になつて、終に一身の發展を妨げられた。其時先生は、兄弟のことであるから非常に之を惜んだ。その所感が、偶然詩に現はれたものであると申された。其詩はかう云ふのである。凌霄花善く媚ぶる物に遇ふて自から縋繆。長松曾て策欲脱。無山と云ふのである

を失す。脱せんを欲すれども竟に由無し。

が、此話を聞てから讀んでみると、如何にもと思はれる所がある。孔子が、「君子に三つの戒めあり、其少なるや、血氣未だ定まらず、之を戒むる色に在り」と申されたが、深く注意すべき事である。

四 春寒の佳句

やはり宜園門人の話になるが、肥前の人に、成富某といふ秀才があつた。才學共に

春寒の佳句

讀方

天は夕を成し難し
花間の路。春未だ
寒を消せず竹裏の
庵。

修養詩話

卓越して、後來望を囑せられた人であつたと云ふことである。其七律の一聯に、天難成夕花間路、春未消寒竹裏庵、といふのがある。如何に才氣に満ちて居つたか、一讀すれば、其人物のほどが想像せられる。惜しいことには、或時酒氣に乗じて、腰間の秋水を拂つて人を斬つた爲めに、終に其身も自殺して、あたら秀才を、花も咲かせずに葬つ

てしまつたといふことである。孔子が「君子に三つの戒めあり、其壯なるや、血氣方に剛し、之を戒むる鬪ふに在り」と申されたが、之も壯年時代には深く注意すべきことである。

五 李白に倍せる詩

詩話が大變かたぐろしく成て、修身の話のやうに成て來たが、李白の詩に、峨媚山月

李白に倍せる詩

讀方

峨眉山月半輪の秋影は平羌江水に入て流る。夜三溪を發して三峽に向ふ君を思へども見えず渝洲を下る。

修養詩話

歌と題して、峨[○]眉[○]山[○]月[○]半[○]輪[○]秋[○]影[○]入[○]平[○]羌[○]江[○]水[○]流[○]夜[○]發[○]三[○]溪[○]向[○]三[○]峽[○]思[○]君[○]不[○]見[○]下[○]渝[○]洲[○]といふのがある。之も絶調の中に數へられた詩であるが、或人が此詩を稱讚して、如何にも絶代詩人の作であると云うた。すると客人が云ふには、それ位は何のことはない、我輩でも其れに倍[△]した[△]詩[△]を作り得ると云ふそこで主人も聞きとがめて、李白は漢士唯

一の詩人にして、其中でも此詩は絶調であるといふのに、君は之に倍した詩を作るとは、不遜にも程があると申した。其時客人は、何も言はずに、直ちに筆を把て一絶を記し、之を主人の前に呈した。其詩に曰く、峨眉山月一輪秋、影入平羌江水流、夜發六溪向六峽、思君不見下渝洲、といふのであつた。これはなる程、數學上から云へば、半輪が一

李白に倍せる詩

輪となり、三溪三峽が六溪六峽となつて居るから、確かに李白の詩に倍して居る。詩話としては、こんな事も一興である。

六 子玉の秀才

淡窓先生の門下で、顔回と云はれた程の高弟は、中島子玉である。頼山陽も其才氣に驚て、予れ九州に遊んで、山水に耶馬溪を得、人物に子玉を得たといはれた程の人で

讀方

春花擔ふ處雲の重きを知り。修竹倚る時露の多きを覺ふ。

ある。其美人の十二詠の中に、美人の肩を詠じた聯句に、春花擔處知雲重、修竹倚時覺露多、といふのがある。杜甫の美人の詩に美人が愁に沈んで居る處を寫して、日暮倚修竹と吟じてある。子玉の後の句は、この杜甫を引用して居るので、一層面白い譯であるが、其詩才の程が想像せられる。然かし此詩は、世人も多く知つて居るが、世人の

子玉の秀才

讀方

浦を隔つるの煙帆
秋影淡く。橋を過
るの霜屐夜聲寒し

知らない名句も随分ある。隔浦煙帆秋影
淡、過橋霜屐夜聲寒、といふ一聯がある。是
は實に絶調であるが、あまりに佳句である
ために、流石の子玉も、終に前後の句をつけ
ることが出来ずに死んだのである。後人
が色々と工面して、前後をつけて見たけれ
ど、とても並べられんので、終に已めにした
といふことである。この佳句も、人に知ら

修養詩話

讀方

鳴鶴陰に在て一溪
靜かに。密雲雨ふ
らす半山晴る。

れずに湮滅するは惜いことである。

七 佳句の暗合

相馬松陰師は豊後の人で、予の恩師であ
るが、宜園に遊んで居る時に、山居讀易とい
ふ課題の詩に、鳴鶴在陰一溪靜、密雲不雨半
山晴、といふ一聯がある。易經の中に在る
鳴鶴在陰と、密雲不雨との二句を詩中に引
き入れて、山居讀易の境を歌ふたもので、當

佳句の暗合

讀方

鳴鶴陰に在て春樹
暗く。密雲雨ふら
す暮山低るよ。

時同輩の間に傳誦せられたといふことである。然るに其後秋月天放先生の詩集を讀んで見た所が同じく山居讀易といふ題下に、鳴鶴在陰春樹暗密雲不雨暮山低といふ一聯のあるのを見た。秋月先生もやはり淡窓翁の門に遊んだ人である。然かし詩は兩師ともに暗合に違ひはない、其詩の優劣に至ては、識者の中に必ず之を辯ずる

註解

班婕妤は、前漢の
成帝の女官なり

者があらう。予は此二聯を比較するに由て、凡て詩歌は、深遠限りないので、一字一句も推敲を忽せにせられぬ事を悟つた。

八 竹田の蘊蓄

寵愛の衰へた薄命美人と云へば、誰でも第一に班婕妤のことを憶ひ起す。それも賢婦であるだけに、一層詩人の同情が深い。然るに竹田先生の班婕妤圖といふ七絶に、

讀方

魚鑰聲なく深く門
を掩ふ。竹烟桐月
黄昏なり易し。李
夫人は病み明妃は
嫁す。秋扇の棄捐
は猶是れ恩。

修養詩話

魚鑰無聲深掩門、竹煙桐月易黄昏、李夫人病
明妃嫁、秋扇棄捐猶是恩、と歌ふたのがある。
其寵愛の衰へたのは、誠に不幸には違ひな
いが、それも思ひやうである。李夫人が病
氣に悩んだり、王昭君が和親政策のために
漢家から北方蠻族に嫁したことを思へば、
寵愛の衰へた位はよほどの幸福である。
人間はいかほご苦辛しても、胸中の蘊蓄以

上の詩は出来ぬ。この詩を見れば、竹田先
生の修養の程が思はれる。こんな詩を微
吟しながら、青燈に對して居ると、忽然とし
て胸中に思ふ、貧乏をしても、病氣をせぬが
幸福である。病氣をしても、死なぬのが幸
福である。山茶花樓を見たやうな、六疊二
間の借屋に居ても、家もなくて風雨に曝さ
れる人よりは、餘程の幸福である。こん

なことを考へて楽しんで居る。エビクタス
 が云ふには、「誹られたならば、打たれざり
 しを喜べ。打たれしならば、傷けられざり
 しを喜べ。傷けられしならば、殺害せられ
 ざりしを喜べ。」と申して居る。修養をし
 た人は、詩人も哲人も同じことである。

九 青色を帯びたる詩

淡窓先生の詩話に、青色は天地の秀美で

讀方

三國の舊愁春草緑
 に。六朝の遺恨晚
 山青し。

草は雲夢に連なつ

あるから、青氣を帯びた詩は、唯美感に打た
 れて、其巧拙を顧みる暇がないと申してあ
 るが、なるほど青色を含んだ詩には佳句が
 ある。其中でも、自分に一番好きなのは、唐
 人の詩に、三國舊愁春草緑、六朝遺恨晚、山青
 と云ふのがある。いつ吟じて見ても、楊子
 江上の壯大な風景が思はれる。青色を詠
 じた詩に、石門先生の集中に、草連雲夢春生

青色を帯びたる詩

て春澤に生じ。水
は洞庭に動いて秋
湖に満つ。

胡塞馬嘶いて春色
白く。漢陵狐隠れ
て夕陽青し。

修養詩話

澤、水動洞庭秋滿湖と云ふのがある。之は
いかにも絶調で、天地の間眼の届く限りは
皆青色に變じて居る。雲夢と洞庭とは、有
名な支那の湖水である。石門先生と同じ
く宜園門人で、村上姑南と云ふ詩人があつ
た。春草の詩に、胡塞馬嘶春色白、漢陵狐隠
夕陽青と云ふのがある。胡塞の方は或は
及ぶとしても、漢陵の句に至つては、とても

凡人の及ぶ所ではない。これも青の一字
が讀者の全心を占領して居る。

十 仁齋と徂徠

伊藤仁齋先生は、實に一代の名儒である
其道德堅固にして、利欲のために志を動か
さぬに至ては、精神修養者のために萬世の
手本である。先生ほどの謙遜の人は少な
いが、先生自から、予は一の材能もないが、好

讀方

絶海の樓船大明を震はす。何ぞ圖らん此地柴荆を長ぜ

學の二字に至ては、敢て聖人に譲らずと申して居る。先生の風貌が、此一語で想像せられる。徂徠が如何ほど豪語をなしても仁齋先生にはとても及ぶことが出来ぬ。しかし其豪氣にして識見の秀でたる所は徂徠の唯一の長所である。其肥前の名護屋に遊んで、豊公征韓の跡を弔して、絶海樓船震大明、何圖此地長柴荆、千山風雨時々惡、

んさは。千山の風雨時々惡し。尙作す當年叱咤の聲。

尙作當年叱咤聲、といふに至ては、實に徂徠でなくては出来ぬ詩である。高樓に上て一吟すれば、一時に千山の風雨を呼び起すの感がある。後世何人が作ても、名護屋の懷古としては、此右に出るものは出来まい要するに、仁齋先生は徳に於て勝り、徂徠は豪氣に於て勝ると云ふべきである。

十一 豪氣と溫和の二面

讀方
筑海の颶風天に連
なつて黒く。千艘
の艦艦北より來る

溫和な詩を愛する人もあれば、豪氣な詩を喜ぶ人もある。是は一に其人の性格に基づくものである。龜井南溟先生は、慷慨激昂の風があつたから、頗る豪氣の詩を喜んだ。そこで先生は、山陽の蒙古來の詩を愛して、之を壁間に貼し、酒酣なるに及ぶと朗々節を撃て、筑海颶風連天、黒千艘艦艦來自北、と吟誦したといふことである。淡窓

讀方
錦城の絲管は日に
紛紛。半は江風に
入り半は雲に入る

先生は妙に溫和な詩を愛した人である。先生は、杜甫の花卿に贈つた七絶を頗る愛誦せられた。花卿は官位の進むと共に、漸次不遜の態度が顯はれて、終には天子の宮中に用ふる音楽を、自家の宴會の席にまで用ふるやうに成つた。其時杜甫は、花卿に詩を寄せて、錦城絲管日紛紛、半入江風半入雲、此曲祇應天上有人間能得幾回聞、と云は

此曲たゞ應さに天
上に有るべし。人
間能く幾回か聞く
を得む。

修養詩話

れた。孔子が諫めの法に六種あることを
舉げて、我は諷諫に従はんと申されたが、諷
諫であると、言ふ者は罪なくして、聞く者は
戒むるに足るからである。淡窓先生は、杜
子美の絶代の詩人たる所以は、實に此邊に
存すると云て、深く稱讃せられたといふこ
とである。是は、去年の暮、八十一歳で歿せ
られた淡窓の門人、櫻井桂村翁の直話であ

る。

十二 平野國臣の國風

しかし人間は、唯溫和ばかりでは物に成
らぬ。豪氣の中に溫和あり、溫和の中に豪
氣ありといふ風でなければならぬ。そこ
で論語に、「君子は溫にして厲し」といふ
てある。維新の志士平野國臣の歌に、「我
むねのもゆる思ひにくらぶれば、煙は薄し

平野國臣の國風

櫻島山」といふのがある。これは薩摩に遊んだ時の歌で實に豪氣である。しかしまた一方には、「君が代のやすけかりせば初めより身は花守となりけんものを」といふのがある。實に溫和である。杜子美もやはり溫和の中に豪氣を存して居る。此曲祇應天上有人間能得幾回聞といふやうに頗る溫和であると共に、また一方では

唯使至尊憂社稷諸君何以答昇平と慷慨の意氣を顯はして居る。男としては此二面を併せ有したいものである。序でに云うて置くが平野國臣は生野の一戦に敗れて幕吏の手に捕へられ京都の獄に繋がれて居たが元治元年七月二十日蛤御門の戦争の時に火事が起つて獄屋の附近まで焼けて來たので獄を出して他に移すのは危険

であるといふので、國臣以下三十三人は、此時終に斬に處せられた。其後星移り物變つて、國臣等の埋骨の所が不明に成て居たが、去年の十一月、京都上京の竹林院の境内にて、庭園の工事中、圖らずも國臣以下三十三人の屍骸と、瓦片に其名を記したものが出て來た。そこで有志の人が、埋め直して、一片の木標を建てたといふから、今日以

後、此愛國の志士のために、香華を捧ぐる人も必らず出来るだらうと思ふ。

十三 桀狗堯を吠ゆる

今年は、戌の歳であると云ふが、『莊子』の中に、「桀の狗は堯を吠ゆる、其不仁なるを惡んで吠ゆるのではない、狗は唯其主人でない者を吠ゆるのちや」と云てある。然るにこの桀狗吠堯の事を引用して、詩人は

狗桀堯を吠ゆる

讀方

寒警風霜の夜。懶

色々と詩を作つたものぢや。前に話した松陰上人の大人に、忍梁上人と申す御方があつて、號は松陵と申したが、やはり宜園門人で、詩に別才を有して居られた。生來犬が好きで、其寺には始終犬を養うて居られたが、養狗といふ題にて、五律が作られてゐる。其前後は今記憶して居られぬが、聯句だけは記憶して居る。寒警風霜夜、懶眠花

眠花柳の朝。性は痴にして猶佛を帯び。客來つて或は堯を吠ゆ。

柳朝性痴猶帶佛客來或吠堯といふのである。兩聯共に頗る面白い。また此柴狗の故事を使用して、秀絶を極めたものは、五岳上人の、明智光春湖水横渡圖に題したる七古である。左馬介光春は、光秀の忠臣である。しかし光秀の意に従へば、信長の逆臣となる。そこで兩方に忠義をする事は出来ないので、士は己を知る者のために死すと

柴狗を吠ゆる

讀方
 桀狗堯を吠ゆる豈
 已むを得んや。逆
 中順を守るも亦是
 れ忠。

決心して、終に本能寺の夜討に賛成した。しかし信長が悪いのではない、唯光秀の恩に背かぬために、其謀議を賛したばかりである。この苦衷を察して、五岳上人の詩中に、**桀狗吠堯豈得已逆中守順亦是忠**と歌うてある。光春にして靈あらば、必らず一知己を得たことを喜ぶであらう。

倫理に由て、安心することの出来ぬとい

ふは此所である。光秀に忠をすれば信長に不忠になる。信長に忠をすれば、光秀に不忠になる。光春は元は三宅ミヤケといふ姓であつたが、光秀が特に明智の姓を許し、高祿を與へて愛撫した士である。其苦衷のほどが察せらるゝ。光秀が、信長を弑するの謀を、光春に打明けて相談すると、光春は涙を拂つて、極力之を諫めた。光秀も此苦諫

桀狗堯を吠ゆる

に由て、不本意ながらも一時思ひ止らんとした。光春は念のために光秀に向て、私の諫に由て、思ひ止まり下さるは難有いが、此謀は誰にも話しはしませぬかと尋ねると、光秀が云ふには、實は齋藤内藏之助等股肱の臣三人に話したと云ふ。光春聞て、あな浅間しや、馴馬も舌に及ばすと申すことの候ふぞや。已に諸人に發言したる以上は、

之を打消す事思ひもよらず。此上躊躇せば却て一家の禍を招かん、いざ今夜の中に出陣し給へ。と申しければ、光秀此に力を得て、即夜令を傳へて、本能寺に向ふたと云ふことである。此境遇を察して見ると、桀狗吠堯豈得已、といふ一句に無限の趣味がある。詩上の趣味はそれでよいが、光春の身にとると、何れにつくが倫理に合するの

桀狗堯を吠ゆる

か、ごちらも理由がある。倫理に由て安心の求められぬのは此所である。宗教の信仰上から云へば、一言にして事が定まる。其時凡ての事情からして、就かねばならぬと思ふた方に就けばよい。その事の善い悪いは、吾等の責任を負ふ所ではない、凡ての責任は如來が負ふて下される。自己は唯思ふたやうにすれば宜しい、倫理已上の

信仰の強き所以は此所である。

今から回顧すると、早や八年ばかり前になるが、或歳の暮に、巢鴨の眞宗大學の樓上で、朗讀會を催した。無我愛主唱者の古川君も席上に居た。其時誰か朗讀番に當つて、太閤記の十段目を、水の流るゝが如く朗讀した。すると古川君は直ちに膝を進めて、さあ倫理で安心の出来ぬは此所である。

一家の中で倫理思想が二つに分れて居る。光秀の言ひ分になると、神社佛閣を破却し、萬民を苦しめたる信長は、當然除くべきものである。武王は殷の紂王を除いた、北條義時は恐れ多くも三帝を遷し奉つた。和漢共に無道の君を除くのは、民を安んずる英雄の志で、女童べの知つた事でない、其妻を叱りつける。光秀の母の言ひ分によ

ると、不義の富貴は浮べる雲、主君を討て功名顔、たとひ將軍に成つたとて、野末の小屋の非人にも、劣り果てしと知らざるか。主に背かず親に仕へ、仁義忠孝の道さへ立たば、もつさう飯の切り米も、百萬石に勝るぞやといふ。兩方共に理由はある。光秀の妻たるものは、母と夫との間に挟まれて居る。どちらに従へばよいのか、どちらに従

うても苦痛は苦痛である。親を棄てるか、夫を棄てるか、一方を棄てねばならぬから苦しい。一家の中でも、親と子息が意見が合はぬとて、色々の苦情が起るが、昔も今も同じことであると話されたことがある。我等は此の如き兩股の倫理に、半分宛つ従ふことは出来ぬ。無法のやうではあるが絶対の安心は倫理以上である。自分のし

た事が、善くても悪くても、どちらでもよい。彌陀の本願をさまたげる程の悪もなければ、念佛にまさるほどの善もない。凡夫の善悪は、畢竟富士山に對する蟻垤である。そんな事に關係して、すむとかすまぬとか云て居るなら、自分は百返切腹しても尙足らぬとは、清澤先生の直話である。

十四 淡窓先生の愛詩

讀方

衾を覆ふて異夢を成す。峽裏碧桃深し。溪深ふして渡るを得ず。一犬花陰に吠ゆ。燕は官の冷かなるを知て將さに壘を移さんとし。犬は

詩の話が大變横道にいきりこんだが思想の順序上已むを得ない。再び狗の話に立ち還るが、淡窓先生の愛吟したといふ古人の五絶中に、覆衾成異夢、峽裏碧桃深、溪深不得渡、一犬吠花陰、といふのがある。作者は誰か知らぬが、いかにも淡窓先生の喜びさうな詩である。清の張船山の詩に、燕知官冷將移壘、犬信家貧不吠人、といふのがある。

家の貧しきを信じて人を吠へず。

讀方

獨兒始めて長じて尾茸茸。行くゆく金鈴を響かす細草の中。瑤階に向つて人影を吠ゆる莫

主人が貧乏をすれば、犬までが元氣沮喪するものと見ゆる。

十五 高青邱の禍源

詩人にも、色々不幸な人はあるが、詩を作て死刑に處せられた人は、明の高青邱である。書犬といふ題にて、獨兒始長尾茸茸、行響金鈴細草中、莫向瑤階吠、人影羊車半夜出深宮、といふのである。時の天子が酒色に

れ。羊車半夜深宮
を出づ。

讀方

女奴醉ひを扶けて
蒼苔を踏む。明月
西園宴に侍して廻
る。小犬花を隔て
空しく影を吠ゆ

修養詩話

耽つて、天下の民を憐まない。それを諷し
た者と見ゆる。羊車とは、晋の武帝の故事
である。武帝は常に羊車に乗じて、美人の
御殿に出入したといふことである。今一
首は、宮女圖といふ題ではあるが、やはり犬
に關して居る。女奴扶醉踏蒼苔、明月西園
侍宴廻、小犬隔花空吠影、夜深宮禁有誰來、と
いふのである。宮女が酒に酔ふて、侍女の

夜深けて宮禁誰有
て來る。

肩に寄り乍ら、御殿に歸來する有様を寫し
たもので、侍宴廻とあるから、天子が酒宴に
耽つて居る事は、此詩の裏面に見えて居る。
其事を宮女の詩に託して、諷したものと見
ゆる。しかし意味はいかやうであらうと
も、詩は單に犬と宮女との詩である。言ふ
者は罪なく、聞く者は戒むるに足る筈であ
るのに、因縁とは言ひ乍ら、三十歳を一つ二

つ過ぎたばかりで、一代の詩人を、死刑とは
實に慘激なことである。高青邱死して、明
朝の文學が衰へたといふが、いかにもさこ
そと思はれる。

十六 詩の讀方

青邱の詩で思ひ出したが、是も十年ばか
り前の事で、一日嵐山に遊んで船に乗つた。
その時偶然にも同船したのが、小栗栖香頂

師と、其令弟布岳上人とであつた。舟中で
起つた詩話に、此頃或漢學者が、高青邱の詩
を出版したが、其詩中の、船歸杳靄唯聞鱸、店
隱蒼茫不見旗、といふ聯句を、「船歸つて杳
靄に唯鱸を聞き、店隠れて蒼茫に旗を見ず」
と讀んである。あれでは折角良工苦心の
處を滅却してしまふ。あれは淡窓先生の
讀まれる如く、「船は杳靄に歸て唯鱸を聞

讀方
 請ふ看よ白首無名の者。曾て是れ談經奪席の人。

き。店は蒼茫に隠れて旗を見ず」と讀むべきであるとは、香頂師の話であつた。所が詩の讀み方の話に移つて、傍に坐して居た木屋一岳先生が申すには、淡窓先生の詩中にある、請看白首無名者、曾是談經奪席人、といふ句を、筑後の雲集上人は、「請ふ看よ白首に名者無し、曾て是れ談經奪席の人」と讀むと話すと、香頂師兄弟は、共に白首を撫

讀方
 路は期せざるの友に遇ひ。渡りは相待つの船に乗す。聲秀で、河鹿を聞き。花然わて杜鵑を見る。

で乍ら、笑聲を漏らして云ふには、是はいかにも妙である、白首に名者なしとは讀方が奇抜であると云て、終に念佛の聲に成てしまうた。其時香頂師の五律中に、路遇不期友、渡乗相待船、聲秀聞河鹿、花然見杜鵑、といふのがあつた、前後は今記憶して居らぬ。其時が六月時分で、清淺の水に河鹿が鳴き、巖上には杜鵑花の紅く然わて居た時であ

つた。今は香頂師も木屋先生も已に故人になられた。序でに一言して置くが、淡窓先生の塾では、奪席會といふものが有て、生徒が輪講の時に、籤に當つた人が、衆人の真中に設けられた席に就て、指定せられた所を講義する。講義がすむと、諸方から質問の矢を放つ、其質問に甘く答へが出来さへすれば、それで得點が出来るが、知らぬ所が

あると、其れを知て居る人が、前の人を驅逐して、其席を奪ふて、再び其所で講義を成すのである。之を奪席會といふので、詩中の談經奪席人とは即ち此事である。

十七 詩と俳句

日本の歌や俳句と、漢詩とを比較すると、どちらが面白いかといふ人があるが、是はどちらにも長所があるので、一方だけ面白

いと云ふ譯はない。摩詰の詩に落花寂々啼山鳥楊柳青青渡水人といふのがある。日本の俳句に、「鳥啼いてひとり花ちる深山かな」といふのがある。ひとり花ちるが實に秀絶である。「春の水岸ねくの深さかな」といふのがあるが是は或は杜甫の春水岸々深といふのから出たのかも知れぬ。これらは偶合にしてもわざと漢語

を俳句に直したのがある。今その一例を示すと。蜀の龐統字は士元と云ふ人は、よほどの人物ではあつたが容貌が振はぬために世人に軽んせられて居た。玄德が荆州を領した時に、此龐統を採用して百里の地に封じた。日本で云へば郡長位の職である。然るに彼れは酒ばかり飲んで居て郡中が更に治まらぬ。そこで玄德も見

切りをつけて、其職を免じやうかと思ふて居た。其時に吳の魯肅といふ人が、玄徳に書を寄せて云ふには、龐士元は百里の才ではない、將軍にでも任じたら、必らず驥足を展ばすであらうと申した。そこで玄徳は、蜀を征伐するに當り、此龐統を擧げて征討總督に任じた所が、果して其才能を現はした。この魯肅の云ふた、龐士元非百里才と

いふ話を題にして、「鳴かぬはづ鶉いれたる目白籠」といふのがある、これは自分の伯父石友の句であるが中々面白い。日本の歌も俳句も面白いが、豪氣天を衝くといふやうな作は、漢詩にして始めて望むことが出来る。

十八 三典の歌

豪氣といふので思ひ出すが、日露戦争の

最中に、旅順攻圍軍の司令長官たる乃木將軍に詩を寄せて、其二兒を戦死させた將軍の心を察し、弔意を表せられた人がある。其詩は七古であるが、かう云ふのである。

三典歌賦呈乃木將軍閣下

阿兄勝典勇拔群。阿弟保典武兼文。乃父將軍名希典。一家三典悉從軍。將軍發日告遺志。武夫捨命尋常事。一人戰

讀方

阿兄勝典は勇拔群。阿弟保典は武文を兼ね。乃父將軍名は希典。一家三典悉く軍に従ふ。將軍發するの日遺志を

告ぐ。武夫命を棄る尋常の事。一人戦死するも棺を出す勿れ。一を留めて且らく待て、兩個の至るを。果然南山激戦の時。冒嶮奮闘長兒を失ふ。敵彈無情なり旅順の役。また乃木のために一枝を折る。報に接するの將軍色動かす。將軍痛まず聞く者痛む。棺を守るの夫人感如何。夫人慟せず國

死勿出棺。留一旦待兩個至。果然南山激戦時。冒嶮奮闘失長兒。敵彈無情旅順役。又爲乃木折一枝。接報將軍色不動。將軍不痛聞者痛。守棺夫人感如何。夫人不慟國民慟。君不見嗚呼忠臣三楠公。殉難報國闔門空。壯烈古今堪相比。三典獻身取遼東。若し將軍の如き武士道精神が、萬古傳ふ

民働す。君見すや嗚呼
忠臣三楠公。殉難報國
闔門空し。壯烈古今相
比するに堪へたり。三
典身を献して遼東を取
る。

鴻東姓ハ作問、
防長新聞主筆、
タリ山口町長ト云

修養詩話

べきものとすれば、此詩も亦萬古傳ふべき
ものである。聞けば作者は、防州山口町の
人で、鴻東と號する人であるさうな。文壇
の氣風漸く軟弱ならんとする今日、此の如
き作者のあるのは、確かに國民の心を強う
するに足る譯である。

十九 詩は氣節を尊ぶ

内に養ふ所が、外に發して詩となるので

讀友
兵馬勿々歳また終る。

あるから、詩を見れば其人が想像せられる。
庭上の趣を見れば、主人の心が分るといふ
のも是である。明治三十七年十二月四日
に、京都に於て詩會が開かれた。白露の雨
軍は沙河に對陣して居る時であるから、何
人も自然其意が詩中に現はれたが、當時の
歴卷は次の詩であつた。歳晚書懷といふ
題にて、兵馬勿々歳亦終。十年磨劍躍長空。

詩は氣節を尊ぶ

十年の磨劍長空に躍る。雲は胡陣を圍んで遼北に連なり。風は蠻煙を捲て日東に起る。既に丹心の壯烈を歎する有り。豈碧血の英雄を泣かしむる無からむや。幽窓一夜寒燈の下。残月霜の如く塞鴻落つる南朝五十餘年の業。盡く忠誠の二字より來る

修養詩話

雲圍胡陣連遼北。風捲蠻煙起日東。既有丹心歎壯烈。豈無碧血泣英雄。幽夜一夜寒燈下。殘月如霜落塞鴻。といふのである。作者は水戸の鴻儒綿引東海翁である。また翁が芳野山に遊んだ時の作に、南朝五十餘年業。盡自忠誠二字來。といふのがある。兩詩を風誦し來れば、水戸の氣節を重んずる學風と翁の人と爲が思ひやられ

ることである。

二〇 美人と落花

「うき人の音頭にをどる女かな」と申す俳句があるさうだが、美人ほど薄命な者はない。美人に生れねば、かゝるうき目も見まいのに、美人に生れたばかりに、心にはぬ人の前にも、其音頭に合せてをどらねばならぬ。趙・歐・北の詩に、生不薄命不美人

讀方

英雄の末路多く佛に歸し。美人の前身或は落花。

讀方

繽紛舞ふが如く亦

といふ句がある。薄命は美人の一條件と見わる。五岳上人の詩に、英雄末路多歸佛。美人前身或落花、と云ふのがある。或落花の三字が頗る妙である。或の字は、極めて軽い文字であるが、用ゐる様によると、千鈞の重さを感せしめる。五岳上人の或落花も其一例であるが、淡窓先生の、百蟲畫卷の圖に題したる詩に、繽紛如舞亦如鳴。畫手何

鳴くが如し。畫手何人か巧みに生を寫す。夜深に向つて此卷を披く莫れ枕邊或は恐る秋聲を起すな。

人巧寫生。莫向夜深披此卷。枕邊或恐起秋聲。といふのがある。是も亦或起の二字に妙味を集めて居る。かやうに觀察して來ると、詩でも文章でも、其蘊奥を窮むるには、實に果てしのないものである。

二一 橋門先生の苦學

淡窓先生の塾に居て、一學生が、貧苦の餘り一計を案して、身に僧衣を纏ふて托鉢を

爲したる所、或家にて親の命日に當るから御經を讀んで呉れと頼まれたが、實は御經を知らないので甚だ困つた。終に『蒙求』の標題を讀んで、御經の代りにした所が、其家の主人が之を覺つて、日田の代官に訴へた。といふ奇談がある。其人物に就て、誰であるとか彼れであるとか、色々に言ふ人があるが、實際は、今の秋月天放先生の大人で、秋

月伯起即ち橋門先生の事である。當時日田の代官から、やかましく淡窓先生を責めた。そこで塾中の同輩の間にて、議論が二派に分れて、無理に引留めんとした者もあれば、一層の事、之を機會に退學して、手に唾して青雲に上れと勧めた者もあつた。中島子玉は其退學を勧めた一人であつた。先生は、終に宜園を退學するに決した。其

讀方

當年の逐客幸に安全。却て輜軒に駕して日田に入る。未だ敢て朝に

後間もなく佐伯侯の儒官に聘せられて、君命を帶んで日田の代官に使ひした。此時先生は、日田に入るや否や、いまだ旅館に着かぬ先に、一番に淡窓先生に謁したといふ事である。其時淡窓先生に呈した七律がある。

當年逐客幸安全。却駕輜軒入日田。未肯造朝來拜謁。如先定館奈尤愆。爲徒

造らず來り拜謁。如し先づ館を定めは尤愆か奈せん。徒を爲て嘗て列す四千の後。使を奉して語んじ難し三百篇此行情の係る所を識んぞ欲せば。公事を將て私縁を續んと要す。

嘗列四千後。奉使難語三百篇。欲識此行情所係。要將公事續私縁。

此詩が橋門先生の集中に在る以上は、此事は確かな話である。其時中島子玉が先生に贈つた五古があるが、之が亦頗ぶる面白い。當時の托鉢の狀から、退學處分の光景まで寫されてあるが、あまりに長篇であるから、此處には略して置く。其後橋門先

讀方

孤客親無し宜しく病を
慎むべし。諸生分有り
好し貧に安んぜよ。
人に告ぐるの語は低聲
に語る勿れ。父に寄す
るの書は須からく正字
に書すべし。

生は、其長兒新太郎氏、即ち今の天放先生を、
淡窓翁の門に入らしめたが、其門出を送る
詩に、孤客無親宜慎病。諸生有分好安貧。
といふ聯句もあり。また、告人語勿低聲語。
寄父書須正字書。といふのもある。親と
して兒を誡むるの語は、此の如く懇切でな
ければならぬ。此父の教訓の下に志を立
て、淡窓翁の薰陶の下に勉強せし天放先生

は、西南の役には、陸軍少佐として、征討總督
の宮の幕僚となられたが、當時征討總督よ
り發せられた軍令は、秋月先生の手につ
たものが多いと言ふことである。今の告
人語勿低聲語の一句で思ひ出したが、先
きの凌雲花の話をして呉れた老人が言ふに
は、拙老が淡窓翁の門に居る時に、唯一度先
生からほめられた事がある。拙老は若い

時から、此通りに話聲の高い男ぢやが、一日
 淡窓翁の話されるには、其方は聲の高いの
 は頗る結構ぢや。人間は陰險の人は必ら
 す私語をする、其方の常に話聲の高いのは、
 性質の磊落な證據である。と申されたさう
 である。この老人とは、豊後國大分郡植田
 村の人で、首藤醒軒名は周三といふ儒者の
 事である。『宜園百家』の中には、首藤米と

出て居る。

二二 齋案の妙句

詩も其來歴を聞いて見ると、之を讀むのに
 一層の趣味があるが、五岳上人の、秋日漫成
 の作に、寒蟬鳴斷夕陽愁、天末浮雲蹤未收。
 不獨宮槐城柳色、貴人今日亦知秋。とい
 ふのがある。人の話す所に由ると、あれは
 櫻田門外に於て、井伊大老が暗殺せられ、一

齋案の妙句

讀方

寒蟬鳴き斷いて夕
 陽愁ふ。天末の浮
 雲蹤未だ收まらず
 獨り宮槐城柳の色
 のみならず。貴人
 今日また秋を知る

讀方
城柳宮槐漫に搖落
悲秋到らず貴人の
心。

時の豪奢を極めた達官貴人も勤王志士の
氣慨の前に、震ひ上つて居る時分に作られ
たものぢやと聞て居る。或はさうかも知
れぬ、さう思ふて讀み直して見ると、結句に
至て一種の音響を發するやうにもある。
五岳上人は、特に古人の句を翻案するに妙
を得て居る。此詩の轉結も、古人の城柳宮
槐漫搖落。悲秋不到貴人心。の翻案であ

るから、一層面白いのである。

二三 星巖の芳山詩

平安朝時代に於て、寛平の歌合せに、秋雁
といふ題にて、紀友則の歌に、「春霞見すて
いかにしかりがねは、今ぞ鳴くなる秋霧の
上に」と云ふのがある。此歌を披講がよ
みあげて、春霞とよみ出すと、満座の人が、ど
つと笑を催ふした。秋の時分に春霞とい

讀方

今來古往事茫茫。石馬
聲無く杯土荒る。春
は櫻花に入て満山白く
南朝の天子御魂香ばし

ふのが可笑しくあつたと見わる。其より
以下の語を聞くに及んで、人々皆感心した
といふ事である。物事は、其始終を聞かす
に、半面だけを聞て、人を笑ふと云ふ譯はな
もいのである。梁川星巖先生の芳野山の
詩に、今來古往事茫茫。石馬無聲杯土荒。
春入櫻花満山白。南朝天子御魂香。とい
ふ名作がある。然るに天下の詩人は、全體

註解

杯土は帝陵の事なり
前漢の文帝の時、帝廟
の玉環を盗む者あり、
帝怒て死に處せん。獄
官諫めて曰く、玉環
を盗んで死に處せば、
他日若し長陵一杯の土
を盗む者あらば、何の
刑を以て之を罪せん。と
一杯は一つかみの意に
して、一杯の土を盗む

としては此詩の秀絶なるを許すが、御魂の
二字に至ては、甚だ穩かでないと言ふて居
る。是も事實を能く調べずには笑ふては
いかぬ。笑ふ人が却て自分の無學を表白
する事になる。清人の編んだ『嶺海詩鈔』
の中に、潘藝字は遊亭といふ人の、明史雜感
といふ七律が十首ほど載せてある。其中
に、淚灑棠陰披髮去。年々花護御魂香。と

とは、長陵に葬れる高祖の陵を發く者あらばその意なり。これより轉して帝陵の事を抔ホドと云ふ。

修養詩話

いふ句がある。然れば星翁の作は決して典據のない事ではない。星翁手澤の『嶺海詩鈔』二秩は、江馬天江翁に傳はり、今は京都の詩人神田香巖翁の家に在るといふ事である。

二四 萬里と竹田

帆足萬里先生は、詩とか風流とかいふ事を非常に嫌ふて、是等は畢竟、竹林七賢の亞

流であると言ふて居た。此調子であるから、淡窓先生以下、宜園一派の詩が甚だ氣に入らぬ。あれは詩といふべきものではない、滑稽と云ふべきものぢやと批評せられた。そこで一人の門人が、淡窓の詩が詩でないならば、眞の詩は果していかやうのものであるかと御尋ね申すと、先生襟を正して、詩は則ち三百篇是也と云はれたといふ

事である。しかし其萬里先生が、『遠思樓詩鈔』の序文をかいては、ひごく淡窓先生の詩をほめてある。やはり茶席の打明け話と、外交上の辭令は、自から異なるものに見ゆる。山陽先生は、ひごく竹田先生を信じて、竹田も亦畫をかいて、得意の作を得た時は、此畫には山陽已外一人も贊を爲すを許さぬときばつて居る。そこで詩畫風流

を好む人は、竹田以前に竹田無く、竹田以後に竹田なしと稱して居る。然るに竹田が杵築キヅキに旅行して、萬里の門を敲いた時に、萬里は病に託して面會を謝絶した。其時萬里が云ふには、竹田などは畫人であるから、萬里先生に御目にかゝつた事があるなど稱して、それを餌に自分の畫名を弘める積りであると云はれたさうな。是は其時萬

里の書生をして居て、竹田の來た時に取次ぎに出た人の直話であるから、間違はない。然るに竹田の『杵築紀行』を見ると、萬里を訪ふて御目にかゝつたと記してあつて、門前拂ひの事は一言も云てない。そこが竹田先生の温厚な所で、人知らずして慍らず、亦君子ならずやと申すべき所である。秋扇棄捐亦是恩といふが如き詩は、此精神

から出たものである。しかし萬里先生の見識の高い事は、兎も角も之を認めねばならぬ。

二五 兩雄の苦心

山陽が淡窓を訪問して、席上互に詩を賦したが、兩雄共に、敵手を驚かす積りで、山陽は七律を作り、淡窓は七古を作つた。是は淡窓は平素七律が上手で、山陽は七古が上

手であるから、各々敵手の意表に出る積りで、陣地の取り方がかやうに成つたものである。しかし其詩に至ては、淡窓の七古が、遙かに山陽の七律を抜いて居る。是は山陽の門人と雖も、齊しく首肯する所である。『遠思樓詩鈔』中に在る、席上走筆似頼子成といふ七古は、實に山陽を善く寫してある。あの詩に對しては、山陽も深く感謝せねば

ならぬ。然るに兩雄共に詩が出来上て、互に其席上の作を示したが、淡窓の七古をよんで、山陽も其手腕に驚いた。そこで山陽も、是は少し怪しいと思ふたものか、淡窓の小便に立つた後で、其机の引出を明けて見ると、三四日前から推敲して居たものと見て、席上走筆似頼子成といふ題まで附けて、ちやんと出来上つて居たといふ事で

ある。あれほどの七古は、恐らく咄嗟の間には出来まいから、其訪問の日を豫期して、豫め腹案を作つたものと見ゆる。腹案を作つて居たからとて、淡窓先生の徳を傷けることは少しもない。しかし人の小便に立つた留主に、机の引出を明けて見たのは、山陽先生も少々意地が悪いやうに思はれる。

讀方

風雨の夕、門を掩ふて出でず、妻拏環坐、酒を温めて同く酔ひ、歡笑且に達す、亦復一樂。秋晩に樹老い、水落ちて沙淺く、一葉の輕舟に駕し、獨往自適す、亦復一樂。

二六 亦復一樂

竹田の『自畫題語』の中には、之よりも一層奇談がある。竹田が嘗て『亦復一樂帖』といふものを書いた。其一例を示すと、風雨夕、掩門不出、妻拏環坐、温酒同酔、歡笑達旦、亦復一樂。また、秋晩樹老、水落沙淺、駕一葉之輕舟、獨往自適、亦復一樂。先づかう云ふ風に、自己の快樂とする處を、畫に寫し

註 「自畫題語」は、竹田の自畫に題したる詩文集めたるものにして、門人帆足杏雨の編次する所、四冊より成れり、詩畫を樂しむ者の、必ず一讀すべきもの、友人曉烏氏、嘗て之を東京に購ひ、予に寄贈せらる、予之に由て異聞を博するを得たり。

出し、其上に畫意の文章を記したもので、竹田が其知人醉古と云ふ人のためにこの畫卷をかいた。それが頗る秀絶なものであつた。然るに竹田がそれを醉古に手渡しする前に、一寸山陽に見せた所が、山陽がそれを奪ひ取て返さぬ。そして其畫卷の末に、自から筆を把て、奪人之有、以爲己之有、亦復一樂と題して、終に自分の物にして仕

まうた。そこで醉古も一旦は怒つたが、竹田が更にかき直して贈つたので、醉古も漸やく怒りが解けた。豪放磊落な山陽の事であるから、こんなことは何とも氣にかけなかつたものと見ゆる。

二七 奇詩と善詩

人間には、奇人と善人とがある。奇人は必らずしも善人でない、善人は必らずしも

奇人でない。奇人を直ちに善人ぢやと思へば、大なる誤りである。詩を見るにも此考へが大切である。面白いから善いとは言へぬ。南梁先生の話に、「善い詩は面白くない、面白い詩は善くない」と申されたさうである。信仰の話を聞くにも、此心得が必要である。即ち「面白い説教は善くない、善い説教は面白くない」と思ふて居

讀方

禪は詩窟を伏して
靜域に歸せしめ。
酒は愁陣を衝て奇
兵を用ふ。

れば宜い。盛唐の詩は善人である、宋元明清の詩は奇人である。禪伏詩魔歸靜域。酒衝愁陣用奇兵。の如きは、面白いのは面白いが、やはり宋朝已下の詩である。盛唐には此の如き詩は斷じて無い。淡窓先生は、古人を評して、「李白は詩中の仙人、杜甫は詩中の聖人、王維は詩の名家、樂天は詩の大家」と申されたさうな、誠に遺憾なき批

評である。

二八 詩は氣韻を貴ぶ

慷慨淋漓たる詩も善いが、風流自適の詩も面白い。安積良齋の偶成の詩に、自甘無用臥柴關。花落鳥啼春晝閑。有客來談當世事。笑而不答起看山。といふのがある。岳上人の漁父の詩に、功名不換一肩蓑。世路知他別有波。料得上流春已老。網中魚

讀方

白から無用に甘んじて柴關に臥す。花落ち鳥啼て春晝閑なり。客有り來り談ず當世の事。笑つて答へず起て山を看る。

功名換へず一肩の蓑。世路知る他の別に波有

るを。料り得たり上流春已に老ふるを。網中魚少れにして落花多し

讀方

勤王の諸將は前後に没す。西陲僅かに存す臣武光。

少落花多。といふのがある。其風流氣韻に至ては、岳師の作が一頭地を抜いて居る。

二九 慷慨と風流は其人の天性

詩人にも各々長所がある。山陽は豪氣に長じ、岳師は風流に長じて居る。是は畢竟其性格から來たものである。同じ南朝の衰微を寫しても、山陽を以てすれば勤王諸將前後没。西陲僅存臣武光。といふや

慷慨と風流は其人の天性

南風競はず天運變ず。
王氣空しく沈む芳野の
花。

うに直寫になるが、五岳上人を以てすれば、
南風不競天運變、王氣空沈芳野花。とい
ふ様に景情交錯したる秀語となる。臣武
光の三字は山陽先生獨得の筆法である。
王氣空沈芳野花といふに至ては、岳師を除
ては何人も出來ぬ句である。島村大夫と
云へば、豊前小倉藩の家老であつたが、家茂
將軍長州征伐の時に、征長の軍は皆破れて

讀方

贈島村大夫 林 外
袍上の殷紅戰血明かに
相逢て覺ゆす涙先づ傾
く。君存して壯士未だ
かるくしく死せず。
國破れて忠臣名あるを
愧づ。即墨當年齊を保
つ志。包胥今日秦に

離散した。高杉晋作は、此機に乗じ小倉藩
を攻めた。島村大夫は千辛萬苦で防戦し
たが、到底長州の敵でない、終に小倉城は陥
落して、一城の君臣皆離散した。其後林外
先生が、島村大夫に贈つた七律に、袍上殷紅
戰血明。相逢不覺淚先傾。君存壯士未輕
死。國破忠臣愧有名。即墨當年保齊志。
包胥今日哭秦情。羈窓猶惹鄉關夢。復向

慷慨と風流は其人の天性

哭するの情。羈窓猶惹く郷關の夢。復た滄溟に向つて巨鯨を捕ふ。

贈島村大夫 五岳

一忠何ぞ願はむ聲譽を布くを。百戦功高ふして國却て除く。末路の英雄は何事をか作す。村居母に陪して農書を讀む。

芳山 東海翁
南朝五十餘年の業。盡

滄溟捕巨鯨。といふのがある。いかにも慷慨淋漓である。然るに同じ島村大夫に贈つた詩でも、岳上人と來ると、すつかり趣きが異つて居る。一忠何願布聲譽。百戦功高國却除。末路英雄作何事。村居陪母讀農書。いかにも風流である。芳野山懷古の詩でも、綿引東海翁の南朝五十餘年業。盡自忠誠二字來。は流石に水戸風が露は

く忠誠の二字より來る
芳山 岳上人
杜宇一聲春夢に似たり
南朝の恨みは夏山の雲に在り。

れて、慷慨多感の情が満ちて居る。岳上人の、杜宇一聲春似夢。南朝恨在夏山雲。と云ふが如きは、いかにも風流に出來て居る。是は氣節と風流との間に、敢て甲乙を論ずるのではない。氣節もよいが、風流も面白い。但し岳上人の詩は、風流を以て勝て居るといふに過ぎないのである。

三〇 實景の詩歌

讀方
梅花は避けず要衝の地。開いて關門殺氣の間にあり

肥後國木留山と云へば、西南戰爭の時に、官賊對峙して、激しく戰ふた所であるが、ほんのりと櫻の咲く四月時分に、此陣中に在て、一木留山かすむ砦のあはひより煙ると見しは櫻なりけり」とは、含雪將軍の作であるが、馬關戰爭の前後に當て、梅花不避要衝地。開在關門殺氣間。とは、岳上人の風詠である。其實景の妙に至ては、詩歌共に、

一字一句を動かすことが出来ぬ。

三一 至誠天に徹す

實境の詩歌は、文字以外に、讀者を感奮せしむるの力がある、つまり至誠の顯現である。豊後の日田に千原夕田といふ詩人があつた、やはり淡窓の門人である。其家が頗る富んで居たが、仁慈の深い人で、村中の貧民には、常に米錢を施してやつた。幕府

至誠天に徹す

時代には、民間の租税を、一度この千原家に集めて、それを日田の代官に收めたものぢやさうな。然るに慶應三年に、勤王の志士が、豊前の古城山に兵を擧げた。それを聞くや否や、代官以下鼠の如く遁げ去つて、終に無政府の姿となつた。其明年の正月早々が、鳥羽伏見の戦争で、明治政府から、松方正義氏を以て日田縣知事に任じた。高木

は風に吹かるゝと云ふ俗諺もあるが、或人が縣廳に向て、千原家が多く、の財産を有して居るのは、全く日田代官所の没落時分に、民間から預かつた租税を、其儘自家の物としたからであると訴へた。松方知事は、赴任早々であつたが、急に千原夕田兄弟を捕縛して獄中に繋いだ。かういふ時には、何が頼みになると云ふても、自分の至誠ほど

讀方

窮して人を尤めず
豈天を怨みんや。
唯悲む老母の獨り
潜然たるを。永山
の夜雨蕭々の夕。
壁を隔て弟兄愁へ
て眠らず。

修養詩話

強いものはない。千原氏兄弟は静かに獄中に囚はれた。其時の詩に、窮不尤人豈怨天。唯悲老母獨潜然。永山夜雨蕭々夕。隔壁弟兄愁不眠。と讀まれたさうな。一字一句が實境であるから、文字以外に至誠の氣が流露して居る。獄中には、兩人を同じ室に入れず、必らず別室にするさうな。そこが、隔壁弟兄愁不眠といふ處であ

る。吉田松陰が刑に臨んで、「親を思ふ心にまさる親心、今日のおとづれ何と聞くらん」と讀まれ、平野國臣が刑に臨んで、「年おいし親のなげきはいかならん、身は世のため、に思ひ代へても」と讀まれたさうであるが、今の詩中の窮不尤人豈怨天。唯悲老母獨潜然。と相並べて見ると、千歳の下尙讀者をして嗚咽せしむるものがある。

至誠天に徹す

千原氏の獄に投せらるゝや、村中の人は總
 出になつて、あの千原の御主人が、何の租税
 を盗みませう、是は眞の冤罪である。此上
 は、筑前の太宰府の天神に參り、其冤を訴ふ
 るより外はない、「心だに誠の道にかなひ
 なは、祈らすとも神や守らん」と讀み玉
 ひし菅公の神靈は、必ず我等の意志を聞届
 けて呉れるに違ひはないと、老を扶け幼を

携へて、日田から太宰府まで、十五里に近き
 道を、徒歩の參詣を初めだした。其人影が
 絡繹として數里の間に續いたから、松方公
 は驚いて、何事ぢやと尋ねると、乃ち今の仔
 細である。此上は詮議に及ばずとて、即日
 縛を解いて、千原兄弟を家に歸へしたとい
 ふ事である。幸に松方侯爵は存命である
 から、此事は記憶して居られるに相違ない

讀方

秋風白髮三千丈。
夜雨青燈五十年。
西舍兒を失ふて宵
半に哭し。東隣婦
を迎へて日長けて
眠る。

三二 絶海の詩

秋風白髮三千丈。夜雨青燈五十年。西
舍失兒宵半哭。東隣迎婦日長眠。とは、五
山の詩僧絶海の作であるが、前聯は直ちに
盛唐の壘を摩し、後聯は、人世の榮枯盛衰を
眼前に見るが如くある。

三三 楊貴妃櫻の歌

嘗て淡窓の門下にて、五岳三洲青村林外

の四人が互に才筆を磨して争鹿會を爲し
たが、皆悉く三洲の手に取られたさうであ
る。風流餘韻に至ては、岳師の長とする所、
才氣縦横に至ては、三洲の右に出る者はな
い。三洲は勤王の士と相通じた爲めに、幕
府から手が入つて、常に諸所に隠れて居た
余の村に遁れて來た時は、實に危急存亡の
秋であつたが、先生の考へでは、燈臺の本暗

しといふ諺もあるから、他の藩に逃れたよりも、幕府直轄の天領に居れば、却て危難を逃れるか知れぬといふので、余の村に隠れたのである。當時先生は毎日一室に忍んで、「死すべき時に死せざれば、死にまさらたる耻あり」と、世の諺を聞きつるに、今は我身を如何にせん」と、自作の今様を歌ふて、一絃琴を鼓して、其憂悶を慰めて居た。其

讀方

玉環の妖血天寶を汗す
阿瞞狼狽蜀道に老う。
沈香亭の北胡騎の塵。
牡丹知る有らば耻應さに抱くべし。以て我が櫻に名く眞に奇冤。千載人の平反を爲す無し色を以て花を品す是れ定例。吾れ今評隲仔細

慷慨淋漓の氣が迸つて、詩となつたものが先生の楊貴妃櫻歌である。

楊貴妃櫻歌

玉環妖血汗天寶。阿瞞狼狽老蜀道。沈香亭北胡騎塵。牡丹有知耻應抱。以名我櫻眞奇冤。千載無人爲平反。以色品花是定例。吾今評隲要仔細。我邦元自多名媛。比擬何用假海外。言其綺乎如紫史。湖月

を要す。我が邦元と自
から名媛多し。比擬何
んぞ用ぬん海外に假る
を。其綺を言はむが紫
史の如し。湖月光り映
して彤管燦らかなり。
其清を言はむか清氏に
似たり。香爐峯の雪簾
を掲げて起つ。幽は小
督琴中の怨みの如し。
曉風殘月嵯峨の里。艶
は靜姫の王孫に別る。

修養詩話

光映彤管燦。言其清乎似清氏。香爐峯雪
揭簾起。幽如小督琴中怨。曉風殘月嵯峨
里。艶同靜姫別王孫。芳山雪寒紅冰淚。
衣通香肌光透綃。吾嬌貞魂輕落水。凡斯
諸姫皆絶世。櫻花真堪比其美。虞兮歌歇
芳草愁。息偽無言桃花羞。此輩真是家數
小。敢及名花照神州。吾知此論未必得。
舉問花神花神默。我且以臆代花言。未見

に同じ。芳山雪寒うし
て冰淚紅なり。衣通の
香肌光り綃に透り。吾
嬌の貞魂輕く水に落つ
る。凡そ斯諸姫は皆絶
世。櫻花真に其美を比
するに堪へたり。虞兮
歌歇んで芳草愁ふ。息
偽言無く桃花羞づる。
此輩真に是れ家數小な
り。敢て及ばむや名花
の神州を照すに。吾れ

楊貴妃櫻の歌

好德如好色。日東忠義鬱山川。蒸作櫻花
五千年。移植夷蠻花忽枯。義不敢生花性
然。今日虜塵及邊海。胡服蠻語人皆浼。
春風無恙舊櫻花。左近顔色終不改。十字
天泣三郎吟。一株雲護大石心。花櫻花兮
人志士。俗諺却覺託意深。若徒以色而已
矣。何別玉環與清紫。君不聞熱田祠畔尺
寸土。明眸皓齒儼翠羽。咄哉亡國姪婦鬼。

知る此論未だ必らずし
も得ず。擧て花神に問
へば花神黙す。我れ且
つ臆を以て花に代つて
言はむ。未だ見ず徳を
好む色を好むが如きを
日東の忠義山川に鬱た
り。蒸して櫻花と作る
五千年。移して夷蠻に
植うれば花忽ち枯るゝ
義として敢て生せず花
性然り。今日塵塵邊海

修養詩話

遠來異域享鼎俎。誰把雷斧毀祠宇。却祀
我國古烈女。吹起櫻花千年香。摧却梨花
一枝雨。

此筆法であるから、才氣の迸る所其極を
知らない。櫻花と云へば、大和魂の發現ぢ
やと云ふて居るのに、楊貴妃を見たやうな、
姪婦の名を附けたのが、甚だ先生の氣に入
らぬのである。そこに託して、平生慷慨の

に及ぶ。胡服蠻語人皆
洩る。春風恙なし舊櫻
花。左近の顔色終に改
まらず。十字天は泣く
三郎の吟。一株雲は護
する大石の心。花は櫻
花兮人は志士。俗諺却
て覺ふ託意の深きを。
若し徒だ色を以てする
のみならば。何ぞ別た
ん玉環と清紫と。君聞
かずや熱田祠畔尺寸の

氣が、一時に迸發したのである。詩の解釋
をするのは甚だ失禮であるが、詩中の玉環
とは楊貴妃の字である。阿瞞とは玄宗皇
帝の幼字である。衣通とは、そとほり姫の
事である。虞氏と息僞は漢土の美人の名
である。末段に至て、熱田祠畔の事がある
が、楊貴妃は死後に仙島に生れて、其名を玉
眞と呼んで居た。此事は白樂天の長恨歌

楊貴妃櫻の歌

土。明眸皓齒翠羽儼たり。咄なる哉亡國姪婦の鬼。遠く異域より來て鼎俎を享く。誰か雷斧を把て祠宇を毀ち。却て我が國の古烈女を祀らむ。櫻花千年の香を吹き起して。梨花一枝の雨を權却せよ。

修養詩話

の中に明かである。然るに其仙島とは、日本之事であつたと見えて、尾州熱田神社の傍に、玉真といふ額までかけて、楊貴妃を祀つてあるといふことぢや。梨花一枝雨とは、楊貴妃の美貌を云ふたものである。長恨歌の中に、貴妃の涙を含んで居る姿を評して、梨花一枝春帶雨と云ふてある。三洲先生の此詩の秀絶なるは申すまでもない

が、この詩を書いた先生の書が、頗る遁勁を極めたものである。慷慨鬱勃の氣が、筆痕の上に現はれて居る。自分の國に、此詩をかいたものが二枚あつたが、一枚は或家の壁にはりつけて、今は其痕跡をも留めない今一つは表装せられて、或家に藏せられてあるが、こんな逸品は何とかして保存したいものである。若し三洲先生の詩集が出

楊貴妃櫻の歌

ないならば、こんな詩も、終には散逸に歸する。由て此に記して置く次第である。

三四 杜子美と海棠花

杜子美は、其父の諱が海棠と音が近いので、生涯海棠の詩を作らなかつたと云ふことである。然かし是は學者の間にも異論のあることである。兎も角も海棠の詩のないことは事實である。しかし淡窓先生

讀方

好雨時節を知り。春に當つて乃ち發生す。風に隨がつて潛かに夜に入り。物を潤して細くして聲無し。野逕雲俱に黒く。江船火獨り明かなり。曉に紅ひ濕ふの處を看れば。花は重し錦官城。

の考へには、唯一首海棠に關したものがあると云ふて居る。それは五律の春雨の詩に、好雨知時節。當春乃發生。隨風潛入夜。潤物細無聲。野逕雲俱黒。江船火獨明。曉看紅濕處。花重錦官城。といふのがある。末句にある錦官城は、蜀中の海棠の名所である。然るに題が春雨で、紅濕と云ひ、花重と云ひ、錦官城と云ふてある以上は、是

杜子美と海棠花

讀方

昨夜海棠始めて雨を着く。數朶輕盈嬌びて語らん。欲す。佳人曉に起きて蘭房を出で。折り來り鏡に對して紅粧に比す。郎に問ふ花好きか妾の顔好きか。郎は言ふ花の窈窕たるには如かず。佳人語る

は海棠花に違ひないとは、淡窓先生の達見である。

三五 海棠花の詩

昨夜海棠始着雨。數朶輕盈嬌欲語。佳人曉起出蘭房。折來對鏡比紅粧。問郎花好妾顔好。郎言不如花窈窕。佳人見語發嬌嗔。不信死花勝活人。把花揉碎拋郎前。請郎今夜抱花眠。といふのは、唐の白虎の

讀方

人は報ず春歸つて少らくも停らず。匆々去て上る水邊の亭。落花

を見て嬌嗔を發す。信ぜず死花の活人に勝るを。花を把り揉み碎いて郎が前に抛つ。請ふ郎今夜花を抱いて眠れ

手に成つた海棠の詩である。女といふものは、是れほどまでに嫉妬深いものか知らぬが、兎に角女性の一面を顯はして居る。若し是が事實とすれば、女性の前では、うかど花をほめる事も慎まねばならぬ。

三六 詩中の青色

人報春歸不少停。匆々去上水邊亭。落花一道趁波下。界斷春江十里青。とは、三

一道波を趁おふて下る。界斷す春江十里の青。

讀方

絲竹聲悲んで雲停まらんと欲す。春に餞して聊か此に旗亭に上る。一任す居易の長恨を歌ふに。許さず屈平の獨醒を誇るを。芳草萋々昨雨を經。殘花落々晨星に似たり。明朝酒解けて歸路に向へば。滿

修養詩話

洲の墨堤殘春の詩である。絲竹聲悲雲欲停。餞春聊此上旗亭。一任居易歌長恨。不許屈平誇獨醒。芳草萋々經昨雨。殘花落々似晨星。明朝酒解向歸路。滿目江山入夏青。とは、岳上人の送春の詩である。兩詩共に、青の字を用ひた所に萬鈞の重さがある。淡窓先生が、青は天地の正色であるから、之を用ふれば、詩に一段の美觀を添

日の江山夏に入て青し
八百八街宵月明ら
かに。秋風處々に
蟲聲を賣る。貴人
は解せず籠間の語
總て是れ西郊風露
の情。

ふると申されたのは、如何にも眞理である。

三七 杏坪の佳品

八百八街宵月明。秋風處々賣蟲聲。貴人不解籠間語。總是西郊風露情。といふのは、頼杏坪の江戸城中の作であるが、自分は唯蟲聲を聴くの詩と心得て、頗る面白い詩であると思ふて居たが、是が安政五年、勤王の志士が捕縛せられて、獄中からの言上

杏坪の佳品

が幕吏のために却そけられた時分の詩ぢやと聞て見れば、轉結に至て無限の趣味がある。なるほど詩は、かう云ふ風に作らねばならぬと思ふ。これでこそ、言ふ者は罪なく、聞く者は以て戒むるに足るのである

三八 他力の中に疑雲なし

人間は、眠らうとすれば眠られぬ。眠つても眠らんでも、ごちらでも善いとなれば

讀方

着意花を栽へて花
發かず。無心柳を
挿んで柳陰を成す

何時の間にかころりと眠る。忘れやうとすれば忘れられぬ。忘れても忘れんでもごちらでも善いとすれば、何時の間にか忘れて居る。兒のほしい家にはなかく、兒が生れぬ。もう生れんでもよいにと思ふ家には、幾人も兒が生れる。古人の詩に、着意栽花。花不發。無心挿柳。柳成陰。といふのがある、やはり此邊の消息と見ゆる。如

他力の中に疑雲なし

來の御慈悲を疑ふてはならぬと氣張れば、疑の雲が段々と湧き出て來る。疑ふても疑はひでも、そんな事は構はない、凡夫の心の中は、凡て如來が御承知であると知られて見ると、いつの間にか疑ひの雲は晴れて居る。

三九 文字已外の詩

詩の話は、詩趣を解する人に對して爲す

べきものである。若し俗物に向て話をすれば、天地の間之れほど滑稽なものはない。或る老人が椽端に座して、暮れ行く青山の景色を眺めて居ると、白雲が水の流るゝ如く動いて、老人の庭上にやつて來た。老人は己れを忘れ、下男を呼んで、「門を閉ぢよ。門を閉ぢよ。雲が出て仕まうぞ。早く門を閉ぢよ。」と言ふた。此話を聞て居た客人が

文字已外の詩

家に歸つて云ふには、あの老人は思ひの外馬鹿である。門をしめた所が、庭上を浮動して居る雲が、何んで留まるものか、馬鹿を云ふにも程があると評したさうな。これであるから俗物には詩の話が出来ないのである。なるほど門をしめても雲は留まるまい、しかし其風趣を愛するの情から云へば、暫らくでも門をしめて、其行く雲を留め

て見たい、是れが詩人の情である。「天つ風雲の通ひ路吹きとちよ。乙女の姿しばし留めん」といふやうな歌は、詩人に愛せられて、俗物に誹らるゝ作である。古人が詩向會人吟。酒逢知己飲。と云はれたが、なるほど意味の深いことである。酒は知己に逢ふて高樓に飲むべし。詩は會得する人に向て燈下に談ずべし。

四〇 變化測る可らず

寫し難い所を寫し、形容し難い所を、輕々に形容し去て、圓轉滑脱の間に、胸中を言ひ盡すのは、五岳上人に限る。此點に於ては日本の詩人中に空前絶後である。或は善人の詩でなくて、奇人の詩に成て居るかも知れぬ。しかしあれほど微妙の境に至れば、最早や善も奇もない、一讀茫然として己

讀方

熱發すれば寒暫く逃れ寒驕れば熱も亦避く。冬夏須臾に變ず。知る是れ時疫に觸るゝを。時有てか寒熱會す。割據窟宅を争ふ。内蛇外蛇と闘ふ。傍觀も亦懇々。衆醫皆衣を拂ふ。家人將さに簀さくを易へんさす。郷閭我が死を傳へ。門は已に吊客を見

れを忘れて仕まう。諫山菽村といふ人は淡窓先生の門人で、岳上人とは同輩の間柄である。經術以外に醫術を善くした人で、やはり日田に塾を開いて居た。或時岳上人が熱病に罹つて、危急の場合に臨んだが、菽村の診療に由て回復した。其時菽村に贈つた詩がある。

病起贈諫山菽村

變化測る可らず

る。君至て一診を試む
 笑つて曰ふ猶活く可し
 ぞ。囊を探つて秘方を
 窺ひ。箆を開て神薬を
 調ふ。一碗命を續ぐの
 湯。喉を下つて鬱積開
 く。忽然我れ蘇せり矣、
 扁鵲果して虢を起す。
 二豎再舉を謀る。殘熱
 胸膈に屯す。安國死灰
 を然やし。太原餘孽熾
 んなり。君以て意を爲

熱發寒暫逃。寒驕熱亦避。冬夏變須臾。
 知是觸時疫。有時寒熱會。割據爭窟宅。
 內蛇鬪外蛇。傍觀亦愬々。衆醫皆拂衣。
 家人將易簣。鄉閭傳我死。門已見吊客。
 君至試一診。笑曰猶可活。探囊窺秘方。
 開籠調神藥。一碗續命湯。下喉鬱積開。
 忽然我蘇矣。扁鵲果起虢。二豎謀再舉。
 殘熱屯胸膈。安國然死灰。太原熾餘孽。

修養詩話

さす。胸中奇策あり。萬
 弩龍涓を瘞し。七擒孟
 獲を服す。病ひ是れ少
 しく癒ゆるを加ふれば
 癒ゆるの後飲食を慎め
 草を抜て根を除かず。
 夫差越に亡ぼさる。體
 羸れて勞力を省き。神
 悴れて補益を思ふ。譬
 へば喪亂の後の如し。
 節儉國力を養ふ。君が
 年未だ強仕ならず。醫

君不以爲意。胸中有奇策。萬弩瘞龍涓。
 七擒服孟獲。病是加少愈。愈後慎飲食。
 拔草不除根。夫差亡于越。體羸省勞力。
 神悴思補益。譬如喪亂後。節儉養國力。
 君年未強仕。醫中推巨擘。醜婦忌美女。
 宜免遍倉厄。視人端一方。眼光及經籍。
 折肱不折腰。人物高其格。我已鬼簿。
 因君免窳窳。君曰偶然耳。死生有定局。

變化測る可らず

中巨擘を推す。醜婦美女を忌む。宜しく通倉の厄を免がるべし。人を視る端の一方。眼光経籍に及ぶ。肱を折て腰を折らす。人物其格を高くす。我れ已に鬼簿に在り。君に因て窶を免がる。君は曰ふ偶然のみ。死生定局ありと。猶ほ邯鄲の園みを解いて。魯連徳色な

猶解邯鄲園。魯連無徳色。相迎侑一卮。千紅萬紫節。君術春應妬。開花千古木。自分も、古人の名文や名詩を讀むと、一生涯の思ひ出に、一度こんな文をかいて見たい、あんな詩も作つて見たいと思ふ。然かし岳上人の此詩の如きを讀むと、そんな野心すらも起らぬ。なせならば、かやうな詩は、天才にして始めて出来るので、凡人の企

修養詩話

きが如し。相迎へて一卮を侑む。千紅萬紫の節。君が術は春應さに妬むべし。花を開く千古木。

て及ぶ所でないからである。實に詩ほど面白いものはない。

四一 黄河の水天上より來る

淡窓先生の詩話の中に、青年が古人の詩を讀む時は、成るべく朱筆を把て卷に對し、其佳處妙境と感ずる處には、批點や圈點を附して置くが宜い。また後日に至て再讀する時には、藍色位を以て評點を加へて行

黄河の水天上より來る

讀方

君見すや黄河の水
天上より来る。奔
流海に到て復た廻
らす。君見すや高
堂の明鏡白髪を悲
しむ。朝には青絲
の如く暮には雪の
如し。

くと、自分の思想の變遷や、趣味高尚の進歩の跡が見えて、頗ぶる益があるものぢやと申されてある。近來自分の思想の變遷に顧みて、面白い事ぢやと感じた。自分は少年の時、李白の君不見黄河之水天上來。奔流到海不復廻。君不見高堂明鏡悲白髮。朝如青絲暮如雪。と云ふ詩を讀んで、小供心に、黄河の水が天上より來ると云ふこと

を、一直線に天上より垂下する事ぢやと思ふた。それ故此詩が甚だ氣に入らぬ、如何に詩人の形容でも、あまり實景を離れて居ると思ふた。其後註釋附きの此詩を讀んだ所が、其註釋に、黄河は其源を崑崙山に發して居る。此高山の溪澗から流れ出るから、それを形容して、黄河の水天上より來ると詠じたものぢやと解釋してある。此註

黄河の水天上より來る

釋に由て、始めて天上來の三字の意味が分つた。さて分るは分つたが、何だか腑に落ちぬやうな感がして居た。然るに近來清國內地を旅行した人の話に、秋雨冥濛の候に、直隸の平野を旅行した所が、大陸の平原は、唯一面に雲煙を以て埋められて居る。何處が天上か何處が陸地か、其區別さへもなく、唯見渡す限りは雲煙で、其雲煙の間を

奔て、黄河の水勢が滾々として渤海灣に注いで居る。遠方から眺むれば、眞に天上白雲の間から流れ来るやうに見ゆる。李白の詩に所謂、君不見黄河之水天上來。奔流到海不復廻。と云ふ光景は、直隸の平野を跋渉した人でなければ、其妙味が分らぬと云て居る。これであるから、想像の學問は實地の經驗に及ばないのである。宗教の

信仰も、始めの間は、餘程遠方の所を探て居る。信仰に入て道德者にならんと志す者がある。それが一轉すると、宗教の極致は、悪人救済に在ることが分つて来る。もう此邊で充分心得た積りで居ると、更に再轉して、其悪人とは他人の事ではなくて、我身のことである事が分つて来る。此に至て信仰が活きて来る。宇宙の大靈であることが、

救ひの光りであるとか、唯ぼんやり抽象的に考へて居た事が、今は真正に佛陀の救済を信することになる。自己が悪人と氣附て見れば、冷かな空理でたすかる筈がない。是に於て、五劫思惟の本願と云ふことが、實に親鸞聖人の信仰の中心であつた事が分つて来る。今の詩中の、朝如青絲暮如雪の一句は、いかにも李白の氣象を顯して居る。

此詩の前には、美人も王侯も顔色がない。緑の黒髪も桃李の顔色も、朝には青絲の如く暮には雪の如しと悟て見れば、美貌も富貴も何爲するものぞ。思慮ある人にして此詩を思はば、必らず此肉體以上に、何等かの安慰所を求めらるであらう。

四二 貪らざるを寶となす

猿猴捕月圖に題した古人の詩がある。

讀方

月天に在り影淵に在り。鼈勉水を探れば水漣々。長臂縦ひ幾尺を伸ばさしむるも。珠是れ珠ならず月天に在り。妄心忽ち眼前の霧を作す。風を捕へ影を逐ふて迷ふて悟らず。貪らざるを寶と爲す人

自分は吟誦する毎に、深き反省を催する。其詩はかう云ふのである。月在天影在淵。鼈勉探水水漣々。長臂縦令伸幾尺。珠不是珠。月在天。妄心忽作眼前霧。捕風逐影。迷不悟。不貪爲寶人未能。休笑猿猴一時誤。なか／＼面白い。吟ずれば吟する程趣味が湧て来る。不貪爲寶の一語は、司城子罕の古事を引たのである。司城と云へ

貪らざるを寶とす

いまだ能はず。笑
ふを休めよ猿猴一
時の誤り。

修養詩話

ば、我國の府知事位の官職である。或人が
此司城子罕に、寶玉を贈つた。子罕は之を
辭して受けぬ。そこで客人が申すには、此
璧は玉人に見せた所、頗る價值ある寶玉ぢ
やと申す、それぢやから献上するのに、何故
に受納し玉はぬかと申した。其時子罕の
答が面白い。其方は珠玉を以て寶となす
が、我は貪らざるを以て寶として居る。今

爾が無理に此珠玉を置いて行くなれば、其方
も寶を失ひ、我も不貪の寶を失して貪慾の
人となり果てる。それよりも、爾は其璧を
保存し、我は之を辭退するならば、兩人共に
固有の寶を保持する譯ではないかと申し
た所が、客人は返す言もなく、璧を抱いて
退たと云ふことである。猿が月影を見て
珠ぢやと思つて、水中をかき廻はしたと云へ

貪らざるを寶とす

ば、いかにも愚かな事のやうにあるが、我等は、食らざるを以て寶とするといふ妙境に至り得ず、一生涯迷て居る。そんなら猿猴一時の思ひ誤りを、さほど大袈裟に笑ふ程の事もないではないか。是れが詩人寓意の存する所である。自分の故郷に、一農夫があつて、田地もある、別に蓄財もして居て、地方では人に羨まるゝ境遇であつた。

然るに、何か一儲けしたいと思ふて居る所に、道路改築の請負工事をする者があつて、入札はしたが資金がないので、終に彼の農夫に説いて、三千圓ばかりの資本を出させた。農夫も百姓をしながら、年々僅かの利益を得るよりも、此工事に資本を投ずれば、數月の後には、三千圓投じたものが、四千五百圓に成て還ると云ふので、喜び勇んで出資し

たが、更に元利共に還らない。道路の工事は出来上つたが、債務者の方からは、損をしたとか、縣廳からまだ金が下らぬとか云て一文も還して呉れぬ。さあ農夫の心配は容易ならぬことである。終には自分の村に居るのも、世間の手前が恥かしいと云ふので、可愛い妻子を残した儘、我家を飛出して、何とかして此取り還しをせねばならぬ

と、種々に苦心をして居た。其苦心の最中に、かの農夫に勧める者が有て、今三百圓ほど資本を出せば、暫時にして三倍に成て還ると云ふのである。其理由は、目下賈札の製造中であつて、頗る上出来であるから、何人か見ても見分けは付かぬ、試みにためしに見よと、真正の五圓札を見せた所が、此農夫大に喜んで、八九分通り破産した中から、

百方苦心して三百圓を作つた。併かし今度はなかく用心をして、實物と引代へでなければ、此三百圓を渡さぬと云ふ。勸める者が云ふには、それでは念のため、器械の据付けから、製造の有様を見て呉れ玉へ、しかし秘密を守るために、器械は山中に据ゑ付けてあるからと云て、誘はるゝ儘にかの農夫は、三百圓を懐ろにして、山中無人の幽

谷に入りこんだが、無慘にも此處にて殺害せられて、三百圓を奪ひ取られた。悪漢は罪跡を晦ますため、首を斬取て深淵に沈めたが、其後、首が水中より浮き上つた爲めに、犯人は逮捕せられ、農夫の最後も明かに成て來た。一番哀れなのは、後に残つた妻子である。今年の四月には、其妻は村の人々と共に上京して、御眞影に御禮を遂げ、また一

つには、自分の夫の行衛が、若しや京阪の間ではあるまいかと、萬一の遭遇を期して上京したのち、予が其旅館に赴いた時、彼婦人は低聲にて、若しや夫が上京して、貴僧の寓を問はざりしやと尋ねしが、予は更に消息を聞かずと答へ置きぬ。道理なるかな、五月に入て、新紙の報ずる所に由れば、其殺害せられたるは三月の初旬であつた事が分

つた。妻が京都まで上京して、其行衛を探して居る時は、夫は已に、身首處を異にして居たのである。宿世の因縁とは云へ、實に無慘の極である。然かし其最初の起りを云へば、何か一儲けせねば、妻子を喜ばせることが出来ぬ、何か一儲けせねば、自分が安樂に暮すことが出来ぬと、一向すら妻子や家のためを思ふたのであるが、其結果は終

に妻子に悲歎をかける事に成た。妄心忽作眼前霧。捕風逐影迷不悟。とは實に此事である。人間の欲心の淺墓な事を思へば、猿が一時の思ひ誤りで、水中の月影を探たことを深く咎める程の事はない。人生は苦惱が多いと云て、明暮れ吾人は心配して居る。何が心配であるかと反省して見れば、八九分通りは、さうすれば損になると

か得になるとか云て居る。こんな心を持って居て、道德の實行もあつたものではない。他力の救ひのましませばこそ、こんな悪人が救ひの御手に懐き上げられるのである。と思へば、此御慈悲に出遇ふた事が難有い。詩でも文章でも、落語と同じやうに、最後の落ち場が大切である。此詩でも、猿が珠を探つたと云ふから、子罕の珠の事を引て、

食らざるを寶とす

「貪らざるを寶となす人いまだ能はず笑ふを休めよ猿猴一時の誤り」と云ふ結句の處が頗る善く出來て居るやうに思ふ。詩の作者は、筑後の人井上昆江先生である、君も亦淡窓先生の門人である。

四三 師弟相肖る

詩話が俄かに俗話に成て、誠に相濟みませんが、今度は真正の詩話に移ります。淡

讀方

少女春に乗じて畫欄に倚る。哀箏何事ぞ風に向つて彈す。遊人棹を停めて清唱を聴く。省せず輕舟の流れに灘を下るを。

窓先生の隈川雜詠の詩中に、少女乗春倚畫欄。哀箏何事向風彈。遊人停棹聽清唱。不省輕舟流下灘。と云ふのがある、なか餘韻のある面白い詩ぢやと思ふた。然るに此頃中島子玉の詩を見た所が、龍川舟遊と云ふ題で、十里澄江流向東。雙槳搖去柳灣風。女兒戲捉波間月。不省銀釵落水。と云ふのがある。不省の二字が、淡

師弟相肖る